

「個人主義者」大杉栄

太田哲男

大杉栄（一八八五—一九二三）は、アナキストとして、あるいはアナルコ・サンディカリストとして知られている。彼はアナキストからは礼讃され、マルキストからはもっぱら批判の対象とされ、他の人びとからは敬遠されてきたのではないだろうか。しかし大杉の不幸な死（一九二三年九月）からすでに五十年以上がすぎた。今や大杉の思想的地位を、客観的につきはなしてとらえてよいのではなからうか。

このような観点から、本稿は大杉を「個人主義者」としてとらえようとするものである。大杉ほどのような意味で「個人主義者」であるのか、そのことにどのような意義があるのかを、大杉が出した『近代思想』の時代に焦点をあわせて、考察することにする。

『近代思想』の発刊

大逆事件の年、一九一〇年の一月二五日、大杉は妻の堀保子に千葉監獄から手紙を書いて、出獄後のことを語っている。

まず出版をやってみたい。これは足下もかねて望んでいるところ

ろだ。しかし、僕はこれを商売としてよりは、むしろ社会教育の一事業としてごく真面目にやりたい。「中略」僕は前に言った雑誌が出せるなら、まずこの編集をやりたい。雑誌は「中略」科学と文芸とを兼ねた高等雑誌にしたい。⁽¹⁾だが、この年の五月から大逆事件の検挙が始まった。一〇月一日付堀保子への大杉の手紙には、

僕もすっかり角を折ってしまった。こんどこそは大いにおとなしくなる。もう喧しいむずかしいことはいっさいよしにして、罪とがもない文章でも弄んで暮すしようか。

という文章がみえる。一九一一年一月、幸徳秋水ら一二名は処刑された。大杉は、

春三月縊り残され花に舞う

とうたつた。大杉は千葉監獄を出たあと、堺利彦の売文社にいて、売文にたずさわっていた。堺は、

当時、堺としては、運動の復興について、しばらく時機を待つ

より外に方法がないと考へ、またそう主張していた。ところが、大杉君、荒畑君のごとき少壮気鋭の同志は、「時機を待つ」にたえず、自ら進んで「時機を作る」べきだと考へ、またそう主張した。その出張の実行がすなわち月刊誌『近代思想』であった。

と書き、大杉の「発刊事情」の中の一節、

出てみたら世間は獄中で思つていたより案外に物騒であつた。手も足も出やしない。ぐずぐずしているうちに一年を過ぎ、まさに二年になんなんとする。何かしら社会的に働いていねばやまぬ僕の本能は、そうそう黙つてはいられなかつた。

を引用して、『近代思想』発刊のころの状況を説明している。一九一二年一〇月、『近代思想』は創刊された。幸徳秋水の『平民新聞』や、その後継紙たる『光』や『直言』に、若干の寄稿をしていたにすぎなかつた大杉は、ここで自らの主宰する雑誌をもち、矢つぎばやに論文を書いた。まさに「彼自身に一時期を画するもの」であつた。もちろんそれは、共働者たる荒畑寒村も言っているように、大杉の欲するところを具体的に明言できるものではなかつたけれども。

さて、このようにして発刊された『近代思想』の時代——一九一二年一〇月から一九一六年一月までとしよう——に展開された大杉の思想を見ることにしよう。

『近代思想』の内容

まず、大杉は当時の日本をどう把握したか。時事的問題に触れる

ことの少ない『近代思想』には、この点が具体的に書かれているわけではないけれども、当時の状況を鋭く、「文学的」につくものはある。たとえば、

法律は人を呼んで国民と言う。道徳は人を指して臣下と言う。法律が軽罪人を罰するのは、わずかに教カ月あるいは数カ年に過ぎない。けれども道徳はその上さらにその人の生涯を呪う。

〔中略〕

法律は折々圧制をやる。けれども道徳はのべつ幕なしだ。⁽⁵⁾
あるいは、

私どもは、私ども自身の生活を見るに、目に見える鉄の鎖や手かせ足かせで縛られてはいないものの、やはりいろいろな目には見えない鎖や手かせ足かせで、生涯しばりつけられているのです。こうして生きて行くことがそのまま終身懲役になっているのです。⁽⁶⁾

といったものがそれである。息のつまるような「冬の時代」を大杉はこうした形で描きだしているわけである。そして、その最も鋭い表現は、「鎖工場」の一節に与えられている。すなわち、

夜なかに、ふと目をあけてみると、俺は妙なところにいた。目のとどく限り、無数の人間がうちやうちやいて、みんなてんでに何か仕事をしている。鎖を造っているのだ。

俺のすぐ傍に居る奴が、かなり長く延びた鎖を、自分のからだにひとまき巻きつけて、その端を隣の奴に渡した。隣の奴は、またこれを長く延ばして、自分のからだにひとまき巻きつけて、その端をさらに向うの隣の奴に渡した。〔中略〕み

んなして、こんなふうに、同じことを繰返して、しかも、それが目まぐるしいほどの早さで行われている。

もうみんな、十重にも二十重にも、からだ中を鎖に巻きつけていて、はた目からは身動きもできぬように思われるのだが、鎖を造ることとそれをからだに巻きつけることだけには、手足も自由に動くようだ。せつせとやっている。みんなの顔には何の苦もなさそうだ。むしろ喜んでやっているようにも見える。

しかしそうばかりでもないようだ。俺のいるところから十人ばかり向うの奴が、何か大きな声を出して、その鎖の端をほおり投げた。するとその傍に、やっぱりからだ中鎖を巻きつけて立っている奴が、ずかずかとそいつのところへ行つて、持っていた太い棍棒で、三つ四つ殴りつけた。近くにいたみんなはとき

の声をあげて、喜び叫んだ。「中略」

そしてこの広い野原のような工場の真ん中に、すばらしい立派ななりをした、多分はこの工場の主人一族とも思われる「奴等」が、ソファの上に横になって、葉巻か何かくゆらしている。

というものである。この文章は、工場内部における資本家の専制を示すだけでなく、また、資本主義社会における労働者階級の「疎外」された状況を示すだけでなく、天皇制の下における家族主義的イデオロギーの強さをも見事にうきぼりにしたものだといえよう。それは、一九二二年八月、友愛会を組織した鈴木文治が、労働者の生活の悲惨さを、資本家の無理解や営利主義とともに、「封建制度の遺風」の中にみたことと時期においても発想においても、重なるところがあるだろう。

こうした状況を大杉は様々な言葉で特徴付けようとした。それがたとえば「動物人・機械人」であり、「奴隷根性」であり、「征服の事実」であった。「機械人」とは、

規則とか制度とか習慣とかいう重荷の下に圧しつぶされて、ただ尊敬の恐怖をもってその重荷を仰いで、伝習の奴隷となり、周囲の奴隷となり、その他あらゆるものの奴隷となっている⁽⁹⁾。というものである。そして「征服の事実」とは次のようなことである。すなわち、

歴史は複雑だ。けれどもその複雑を一貫する単純はある。たとえば征服の形式はいろいろある。しかし古今を通じて、いっさいの社会には、必ずその両極に、征服者の階級と被征服者の階級とが控えている。「中略」

社会は進歩した。したがって征服の方法も発達した。暴力と瞞着との方法は、ますます巧妙に組織立てられた。「中略」この征服の事実、過去と現在とおよび近き将来との数万あるいは数千年間の、人類社会の根本事実である⁽¹⁰⁾。

というのである。

次に、こうした状況に大杉がどうたちむかおうとしたかを見よう。その答は、『近代思想』の時代にあつては、「生の拡充」をもってたちむかおうということであつた。すなわち「征服の事実」がその絶頂に達した点で、「生の拡充」をもってこたえようというのである。

生が生きて行くためには、かの征服の事実に対する憎悪が生ぜねばならぬ。憎悪がさらに反逆を生ぜねばならぬ。新生活の要

求が起きねばならぬ。人の上に人の權威を戴かない、自我が自我を主宰する、自由生活の要求が起きねばならぬ。〔中略〕
 生の拡充の中に至上の美を見る僕は、この叛逆とこの破壊との中のみ、今日生の至上の美を見る。征服の事実がその頂上に達した今日においては、階調はもはや美ではない。美はただ乱調にある。階調は偽りである。真はただ乱調にある。¹¹⁾

ということになる。以上に見てきたところから明らかなように、大杉がここで述べていることは決して「破壊的」なことではない。すなわち大杉は、以上にみてきたように、「鉄の鎖」で生をしばり、のべつ幕なしに圧制を行う「道德」の支配する社会という形で一九一〇年代の日本社会を見事に描き出し、こうした社会は「征服者」の眼からは「秩序」正しいもの、「階調」であるだろうが、真に人間的な立場からは何ら「階調」ではない、と主張しているだけだからである。しかしそうした大杉の主張は「征服者」からすればやはり「破壊的」であろう。そうした「征服者」たちの感覚に「媚びて」言えば、「叛逆」と「憎悪」と「破壊」の中にしか、美は、真はない。「美は乱調にあり」である。こうした状況を大杉風に表現すれば、

僕等は、すでに幾度かいわゆる「秩序」を「紊乱」した。また幾度かいわゆる「朝憲」を「紊乱」した。そして今また、本紙「『平民新聞』」の第一号によっていわゆる「安寧秩序」を「紊乱」した。「秩序」とは何ぞや。〔中略〕
 人類の多数が、少数怠惰者の飽くなき貪婪と驕慢と痴情とを満足せしめんが為、刻苦して労働する。これすなわち「秩序」

である。

人類の多数が、物質的生活と精神的生活との合理的発達に必要なあらゆる条件を奪われ、科学的研究や芸術的創造によって得られた享樂を夢にだも知らざる、その目嫁ぎの駄獸的生活に墮す。これすなわち「秩序」である。〔中略〕

しからば、この「秩序」の「紊乱」とは何か。〔中略〕

真に自己のためなると同時に、また他の同類のためなる、もつとも美わしき激情の爆發。もつとも大いなる献身。もつとも崇高なる人類愛の発現。これすなわち「秩序」の「紊乱」である。¹²⁾

ということになる。

大杉は、自己を拡充する生という立場を、「個人主義」の立場としてもとらえている。今、大杉の個人主義を「社会的個人主義」として特長付けるとすると、

社会的個人主義とは、各個人の個性の多種多様な自由な発達が、社会組織の第一条件であり、社会進化の第一要素であるべきことを主張する、一社会的学説である。¹³⁾

ということになる。そしてこの社会的個人主義は大杉をして「僕が一生の事業とするこの学説の研究と伝道」と言わしめるようなものであった。彼はこの社会的個人主義をいくつかの論文をつうじて明らかにしようとする。「近代個人主義の諸相」という論文もその一つであった。この論文において大杉は、近代の個人主義を歴史的に二通りに総括することをつうじて、彼の考える個人主義を明確にしようとしている。

第一。近代における「個人主義の第一期」は、「個人が社会を支配して、その夢想するところに従って社会を改造せんとする、自ら頼む雄々しき反逆」であった。しかし個人主義はその「第二期」において、「いっさいの努力を無益であると観念してしまった。社会的宿命と桎梏との前に、あくまでも敵意を抱きながら、それと闘うことを余儀なく断念した」のである。今まさに生まれるべき「第三の個人主義」が大杉の主張する個人主義、すなわち、「第一期個人主義と第二期個人主義との調和」である。

第二。「近代の個人主義は、まったく内のみ向う心理的態度」をもち、「今日の社会組織に対する客観的知識を欠き、したがって早くもいっさいの社会組織を否認する悲観説に陥る」ところの「心理的個人主義」が一方にあり、他方には、「いっさいの個人が社会の中に互いに調和しつつ発達し、その多種多様なことがかえって文明の富と美との保証になると信じて」いて、「今日の社会組織を是認した上での、部分的改良を試みるに過ぎない」ところの「社会的個人主義」がある。かくして、今まさに現われつつある「新個人主義」は、「心理的個人主義と社会的個人主義との融合」であり、これが大杉の主張するところだということになる。

われわれはこの節で、大杉が一九一〇年代の日本社会をどう把握したかを見、ついでその社会にどう立ちかおおうとしたかを見た。それが「生の拡充」や「社会的個人主義」の主張であった。「生の拡充」の内容は、さきに見たところからもわかるように、「社会的個人主義」の主張にふくめて考えることができよう。それゆえわれわれは、大逆事件以後の冬の時代に大杉は「社会的個人主義」の立

場から立ちかおおうとした、とまとめることができよう。そしてわれわれはこのような文脈において大杉を、「個人主義者」としてとらえたいと思う。

『近代思想』の意義 (一)

われわれは以上において大杉の『近代思想』に展開された思想をみてきたのであるが、次にその意義を考えてみたい。

ひとはこの時期の大杉の文章が余りに「文学的」であることをあやしむかもしれない。客観的な現状分析もなく、したがって変革のプログラムもないではないか、と思うかもしれない。しかし、当時の労働者の状態はどのようなものであったか。友愛会はわずか一五人で出発し、創立一週年の一九一三年には、組合員は一三二六名、一九一七年には二万七千人といった程度であった。一九二二年に山川均は、

メーデーは近づいた。〔中略〕

一四、五年むかしをふりかえってみると、日本のメーデーは実に心細い寂しいものだった。日本全国にわずかに一〇人か二〇人の同志が集まって、それも、かくれるようにして、この祝日を祝っていた。それは威力を示す日ではなくて、自分らの無力を、しみじみと感ずる日であった。〔中略〕

それから十幾年の間は、一七、八人の行列すらも思いよらなかつた。行列どころか、一七、八人がこっそりと一と所に集まることすらもむつかしかった。⁽¹⁶⁾

と書いている。同じ一九二二年、大杉も、九州の「八幡罷行記念演

「説会」において、

僕が十年前当地を通過した時、汽車の窓から幾百となく突立った巨大な煙突を見て、友人と共にこの煙が労働者の手によって一日でも止められたなら、僕は死んでもいいと話した事がある。「中略」五年前までは、労働運動は余り重大視されず、暖簾に腕押しの状態であった。諸君も五年以前には決してこの煙を止め得るとは考えなかつたであらう。然るに今日では、この煙が止まった位で死んでもいい、と言えば、諸君は笑うであらう。それまでに運動は進んだ。

と述べた。こうした「冬の時代」に、誰に向つて精緻な革命論を説く意味があるのか。そのように考えると、大杉が『近代思想』によつて自己を文学的な発言内に限定しようとしたことは、大杉自身はのちにこれを「知識的手淫」という特徴付けによつて否定しようとしたのであつたけれども、当時の状況からみて、十分に意味のあることだつたのではないだろうか。ここに「当時の状況」というのは一方ではここに引用した山川や大杉のいったような事態すなわち「冬の時代」ということであるが、他方では、『白樺』創刊(一九〇年)、『青鞥』創刊(一九一一年)などにみられる、個人主義的な思潮の前進をさしている。大杉もこうした事態を

「自我の尊厳」や、「生の創造」は、近時のわが思想界、ことに文壇における論議の基調となつた。もっともこの「自我」や「生」の内容においては、多くの議論も未だはなほだ朦朧たるを免れないのであるが、ともかくも、一代の精神がこの人間性の根本に向つたことは、僕等自我論者にとつて、歓喜にたえな

い現象である。⁽¹⁹⁾

というふうにつかんでいる。そうした時代について平塚らいてふ(一八八六一一九七二)は、『青鞥』発刊によせて書いた「創刊の辞」を想起して、

この文章の基調には、まずなによりも女性は人間として、個人としての自覚から出発しなければならぬ。女性が一個の人間として目ざめ、その自我を全的に解放する精神革命が必要であるという考えが流れております。それには内外のあらゆる庄力をはねのけて、この尊い本来の自我を発掘し、全的な人間としての自我を確立しなければならぬという信念から「元始女性」はじつに太陽であつた、真正の人であつた、いま、女性は月である、他に依つて生き、他の光によつて輝く、病人のような蒼白い顔の月である」という、現状否定の言葉が理屈なしに、生まれつたのでした。⁽²⁰⁾

と述べている。また、のちに大杉栄の妻となり、彼とともに虐殺された伊藤野枝を主人公とした小説『美は乱調にあり』(一九六五年)を書いた瀬戸内晴美は、この小説を書くにいたつた動機として野枝の生き方にとらえられたことをあげているが、その野枝の生き方は、

「青鞥」で一番年少の同人が、「青鞥」の歴史と共にその青春を生き、誰よりも長く「青鞥」を守り、誰よりも多く「青鞥」から学び、誰よりも深く「青鞥」に失望し、やがて恋と革命のために生命を賭けるべく「青鞥」をスプリングボードとして、決然と過去を絶ちきり、恋人大杉栄の胸に飛びこんでいった。⁽²¹⁾

というものだったとされている。大杉は、そうした時代の息吹きの中で『近代思想』の刊行をつづけていったのである。

また大杉は「雑誌と言えば、今日の日本の文芸雑誌の中で、僕は『白樺』が一番好きだ」と述べており、「自我の尊厳」や「生の創造」が「論議の基調」となっている思想界に共鳴しつつ、自らもその流れの中にさおさして自己の主張を続けたのである。

こうした時代の流れがいわゆる大正デモクラシーの一面を示していることは言うまでもない。

大正デモクラシーの思想を誰によって代表させ、その思想の特質をどうつかむかは一義的に定まっているわけではない。第一に、吉野作造の民本主義をその代表だとする従来からの研究がある。第二に、「学問の世界でアカデミックに高度の研究成果をあげるとともに、大正デモクラシー思想の鋭な表現者でもあった学者として、私は吉野ら前記の人々〔浮田和民、大山郁夫など〕よりも、美濃部達吉・津田左右吉・柳田国男の三人を挙げたいと思う」とする見解がある。第三に、「内には立憲主義、外には帝国主義」という日露戦争後の自由主義陣営の基本理念を、第一次大戦後において「内には国民民主権主義、外には非帝国主義」という形で克服していった『東洋経済新報』に「大正デモクラシーの最高の思想的達成の一つ」⁽²⁴⁾をみる見解がある。第四に、「大正デモクラシーの底流」を「一九一〇年代後半から二〇年代にかけての、民衆の苦闘ないしあがき」⁽²⁵⁾をあきらかにすることをつうじてみていこうとする見地がある。そして第五に、日露戦争のうちに「暗流となった明治国家への懷疑」⁽²⁶⁾のあらわれ方を基軸に、大正デモクラシーの思想を浮きぼり

にしようとする試みもある。大正デモクラシーというのはもともと政治動向を表現する言葉であるから、その思想というのも政治思想を中心としてとらえられるのは自然であろう。けれども第五のような基準を設定すれば、ふつう大正デモクラシーの思想家としてとりあげられる人びとよりも広範な群像がうかびあがってくるように思われる。事実鹿野政直氏はその『大正デモクラシー』において、津田、美濃部、柳田らとともに「白樺」や「青鞥」に言及し、作家の吉屋信子を高く評価しているわけである。そのような観点をふまえて大杉の思想を考えてみよう。たとえば芥川龍之介はその『侏儒の言葉』(一九三三年)の中で、

軍人は小児に近いものである。英雄らしい身振を喜んだり、所謂光栄を好んだりするのは今更此処に云ふ必要はない。機械的訓練を貴んだり、動物的勇気を重んじたりするのも小学校にのみ見得る現象である。殺戮を何とも思はぬなどは一層小児と選ぶところはなない。殊に小児と似てゐるのは、喇叭や軍歌に鼓舞されれば、何の為に戦ふのかも問はず、欣然と敵に当ることである。

この故に軍人の誇りとするものは必ず小児の玩具に似てゐる。

〔中略〕勲章も——わたしには実際不思議である。何故軍人は酒にも酔はずに、勲章を下げて歩かれるのであらう？

と書いているが、芥川のこの言葉と、先に引いた大杉の「鎖工場」の一節とを比べてみると、意外にその精神における共通性を見いだせるといえるだろう。すなわち芥川は「軍人精神」を軽蔑的に批判し、大杉は天皇制下の家族主義的イデオロギーによる呪縛を憤怒を

もって批判している。両者は相互に独立に、「非天皇制的」な立場をふみこえて「反天皇制的」な方向へ進み始めているといえよう。

大正デモクラシー期の思想を論ずる場合、普通は一方に「デモクラシー」の思想をおき、社会主義思想や無政府主義思想はいわばその外側にあるとみなされているように思われる。もちろんそれは理由のないことではない。というのは例えば山川均は、「沙上にたてられたデモクラシー」、「吉野博士及北教授の民本主義の不徹底を難す——デモクラシーの煩悶²⁷⁾」などの論文で大正デモクラシーの「旗手」吉野作造の民本主義を批判していたし、大杉も「旨の手引する旨、吉野博士の民本主義墮落論」などの論文で民本主義を批判していたからである。さらに、大正デモクラシーの政治思想面の基調を「君主制のわく内での民主主義、社会主義を支持しない自由主義、帝国主義の容認²⁸⁾」といった点に求めるとすれば、これが広義の社会主義に対立するものであることは明らかであるからである。けれども、大正デモクラシーの思想の性格を「前近代的な封建道徳、絶対主義的・権力主義的・官僚主義的な政治を排斥し、個人の自覚を尊重し、国民の総意に基いた政治の樹立を主張²⁹⁾」するもの、というふうにややゆるく考えるならば、大杉の『近代思想』における思想も、これとそうへだたっているわけではない。すなわち、政治的な面では大杉の思想は大正デモクラシーの思想と対立していたけれどもその「人間学的」な面においては両者は親近性を持っていたといえるのではなからうか。そのように言えるとすれば、先に芥川の言葉と大杉の「鎖工場」の一節との間にあると述べておいた親近性はたんなる偶然ではないのである。また先に大正デモクラシーの思

想の特質をどうつかむかについての様々な立場を列挙した時の「第五」の立場から、鹿野政直氏は、「明治期とは異なるという意味での大正期を準備する意識動向」が明治末期に「暗流」としてうねりはじめていたことをあとづけようとした³⁰⁾。その場合にとりあげられたのは、田岡嶺雲、堺利彦、武者小路実篤、津田左右吉、与謝野晶子、平塚らいてふ、吉野作造、美濃部達吉、柳田国男、南方熊楠などの大正初年の発言であるが、こうした発言の底にある「暗流」は大杉の中にも流れていて、大杉はその流れの中から、あるいはその流れに棹さす形で『近代思想』を発刊し続けたのである。

以上の説明から今やわれわれは、大杉は「大正デモクラシー」の最良の部分と共通の精神的地盤にたちつつ、「社会主義」——「僕は今、この社会主義者という言葉をごく広義に使う。すなわちこの言葉の中に、無政府主義者、労働組合主義者、および社会民主主義者〔すなわち共産主義者〕を含める」という大杉の言葉を念頭においた広義のそれ——の方向をめざそうとしていたのである、ということができよう。

大杉はたしかに「日本のアウトサイダー」（河上徹太郎）とみえるかもしれないし、正木ひろしが書いているように「私たちの学生時代（一九二〇年前後）」には、まだ大杉栄などが殺されず、あんな我儘な人間が一種の愛嬌者として文壇や新聞の社会面を賑わしているほど、日本には余裕があり、自由があった³¹⁾というような眼でみられていたかもしれない。けれども大杉がひきおこしたスキャンダルにより大杉の思想に注目すれば、それは一九二〇年前後の政治的激動期へと動いて行く日本社会を、前進的につきうごかしていく

「暗流」、そしてそこから生まれ、日本国憲法の理念にもつらなるような面をもつという意味での「大正デモクラシー」の思想と同じ地盤にたちつつ、先に述べたような広義における「社会主義」思想をくみだてようとしたことを意味する。

『近代思想』は、したがって、「社会主義」思想を実りゆたかに伸ばして行く可能性を、「冬の時代」において用意していた、ということになるだろう。

『近代思想』の意義 (一)

われわれは先に大杉が「自我の尊厳」や「生の創造」などが思想界の「論議の基調」となったとしている文章を引用した。その引用部分のすぐあとで、大杉は、

けれどもさらに翻って思うに、この自我論や創造論がほとんど流行的に主張せられた原因の一面には、僕等の平素もつとも嫌悪する逃避的態度が含まれていやしまいか。〔中略〕

しかるに現在の多くのこの論者は、周囲のために屈服されることはいさぎよしとせざるもの、なおそれと戦うことをあえてするに至らず、またこの周囲を恐怖するのあまり、それと接触することだに嫌悪して、ついにいっさいの周囲、いっさいの外界に眼をとして、ひたすらにそのいわゆる自我の中に、蝸牛が殻の中にとじこまれるがごとく、逃避し去ったものではあるまいか。⁽³³⁾

と書いている。大杉がここで誰を念頭において批判しているのかは明示されていない。しかし大杉の発想をうきぼりにする意味でここ

に漱石の「私の個人主義」をとりあげておきたい(断っておくが、このことは大杉が漱石を批判していたということを意味するものではない)。

一九二四年二月、夏目漱石は学習院で、「私の個人主義」という講演を行なった。大杉が『近代思想』を廢刊にして『平民新聞』を発行し、発禁の連続をくらっていた頃にあたっている。漱石のいう「個人主義」は、「自分の個性の発展をしとげようと思うならば、同時に他人の個性も尊重しなければならぬ」というものである。

そして「個人主義」と国家との関係は「国家が危くなれば個人の自由が狭められ、国家が泰平の時には個人の自由が膨張してくる、それが当然の話です」というものである。したがって「私のここに述べる個人主義というものは、けっして俗人の考えているように国家に危険を及ぼすものでも何でもない」ということになる。そうした漱石の方向について加藤周一氏は

彼は彼自身の「個人主義」をつくりあげるといふ孤独な力業に、全力を傾けていた〔中略〕。漱石の眼は外部を離れ、いよいよ内部に、——日本の内部ばかりでなく、彼自身の内部へ向う。漱石は富国強兵がもはや国の目標ではないといったときに、それ以外の国の目標を考えていたのではなく、国の問題から離れようとしていたのだ。⁽³⁴⁾

と述べているのは適切である。それに対して大杉の「個人主義」はその内容を異にする。大杉の「個人主義」の内容をみよう。まず、大杉が相馬御風(一八八三—一九五〇、詩人、評論家)に対して書いた文章の中に、

僕と手を携えて個人革命と社会革命との道に強行軍する真の友人⁽³⁵⁾

という言葉がみえ、同じ発想は

僕等の本当の仕事は主としてただ、僕等自身の多少の自己完成と労働階級の自覚と、および僕等自身に対する労働階級の理解とにある⁽³⁶⁾

という言葉にあらわれている。そして、「個人革命」や「自己完成」を重視する方向は、次の言葉に明瞭に示されている。すなわち、

研究や思索は遊戯ではない。僕等は僕等の日々の生活において、必ず何事かを考え、またその考えをあくまで進ませて行かなければならぬ、ある要求に当面する。どうしても放つては置けない何等かの事実に基づかる。僕等の思索や研究は、この事実に対する、僕等自身のやむにやまれぬ内的要求であるのだ。僕等は、僕等自身のこの内的要求を、何よりもまず他人の著書によって、すなわち他人の観察と他人の実験と、他人の判断とによって、満足さすというような怠け者であってはいけない。よしすでに受け入れているある判断があったところで、さらに自らの観察と実験とによって、再び判断し正さなければならぬ。本当に自ら刻苦して、骨身にまでも徹する、僕等自身の判断を造り上げて行かなければならない。この個人的思索の成就があつて、初めてわれわれは自由なる人間となるのだ。いかに自由主義をふりまわしたところで、その自由主義そのものが他人の判断から借りてきたものであれば、その人はあるいはマルクスの、あるいはクロポトキンの、思想上の奴隷である⁽³⁷⁾。

というものである。ここに大杉の個人主義の骨太さが明瞭に語られている。それは「内に向う」個人主義ではなく「個人革命と社会革命」とを同時にめざそうとする個人主義である。こうした個人主義に立脚しながら、大杉は『近代思想』の発行をつづけたのである。そして『近代思想』の廃刊のあとに生まれた『労働運動』（創刊、一九一九年一〇月）は、その「社会革命」の方向にふみだしたことを告げるものであった。

このような個人主義に裏づけられた革命運動の見事さをわれは大杉が『日本脱出記』に記したエピソードにみる。そのエピソードは一九二〇年一〇月大杉が上海に密航した時のものである。大杉はこの時、コミンテルン主催の極東社会主義者会議に出席したのである。大杉は書いています。

僕は、当時日本の社会主義同盟に加わっていた事実のとうり、無政府主義者と共産主義者との提携の可能性を信じ、またその必要をも感じていたが、おのおの異なつた主義者の思想や行動の自由は十分に尊重しなければならぬと思つていた。⁽³⁸⁾ [中略] この各国革命党の運動の自由ということには、朝鮮の同志もシナの同志も僕に賛成した。

そして、コミンテルンの「T〔チェレン〕」は、大杉に「運動をするのに金がいるのなら出そう」と言い、その金はすぐもらえることにきまつた。が、その後また幾度も会つていううちに、T〔チェレン〕は「大杉の出そうとする」新聞の内容について例の細かいおせっかいは出しはじめた。僕には、このおせっかいは、僕が持つて生まれた性質の上からも、

また僕の主義の上からも、許すことができなかった。そして最後に僕は「中略」金など一文ももらいたくないと言った。もともと僕は金をもらいにきたのじゃない。「中略」ただ東洋各国の同志の連絡を謀りに来たのだ。それができさえすれば、各国は各国で勝手に運動をやる。日本は日本で、どこから金がこなくて、今までもすでに自分で自分の運動を続けてきたのだ。これからだって同じことだ。

と書いている。ここには大杉における「個人主義」と「革命運動」との見事な統一があるとともに、「統一戦線」や「自主独立」の論理までもが、大杉の感覚にもとづいて語られている。その「統一戦線」的発想は、大杉版『労働運動』において実現されなかった。(その分析をわたくしは別の論文でとり扱った。)

日本の社会運動の中でこうした大杉の発想は生かされてきたか。ほとんど生かされてこなかったといえるのではないか。大杉の死後五〇年以上が過ぎた今、「党派的」偏見を離れて、大杉の発想が日本思想史のひとつの遺産とされてよいのではないか。

さらに、日本の近代化を思想史の面から論じた人々の少なからぬ部分は、日本における「近代的自我」の挫折について語ってきた。しかし大杉にあつては「近代的自我」は挫折しなかった。米騒動以後の「嵐のような」社会運動の高揚期の中で、大杉は強烈な自我に裏づけられた革命論を展開しようとしていた。大杉の「近代的自我」は「挫折」したのではなく、関東大震災後の混乱の中で憲兵隊の手によって扼殺されたのだった。

註

(1) 「獄中消息」。大杉の文章からの引用は、主として現代思潮社版の全集全14巻や選集によったが、この註においては、論文名と初出誌およびその時期を示すにとどめることにした。なおかなづかいや字体などは適宜改めてある。

(2) 堺利彦「日本社会主義運動小史」(一九二八年)、『堺利彦全集』第六巻、法律文化社、一九七〇年、三四五頁。

(3) 近藤憲二『無政府主義者の回想』、平凡社、一九六五年、一六頁。

(4) 『寒村自伝』(上)、岩波文庫、一九七五年、三四六頁。

(5) 「法律と道徳」、『近代思想』、一卷三号(以下一―三のよりに略記する)、一九二二年二月。

(6) 「囚人」、『平民新聞』、六、一九二五年三月。

(7) 「鎖工場」、『近代思想』、一一二、一九二三年九月。

(8) 大河内一男『暗い谷間の労働運動』、岩波新書、一九七〇年二―三頁。

(9) 「思索人」、『近代思想』一一四、一九一三年一月。

(10) 「征服の事実」、『近代思想』、一一九、一九一三年六月。

この論文の一部は『労働運動』一一四、一九二〇年二月、に再録されている。

(11) 「生の拡充」、『近代思想』一一〇、一九一三年七月。

(12) 「秩序紊乱」、『平民新聞』二、一九一四年一月。

(13) 「社会的個人主義」自序、新潮社、一九一五年一月。

- (14) 「近代個人主義の諸相」、『早稲田文学』一二〇号、一九一五年一月。
- (15) 大河内、前引書、七頁。
- (16) 山川均「メーデー」、『山川均全集』第四卷、勁草書房、二四一—二頁。
- (17) 大杉版『労働運動』、一九二二年三月一日。
- (18) 「知識の手淫」、『近代思想』二一八、一九一四年五月。
- (19) 「時が来たのだ」、『近代思想』二一四、一九一四年一月。
- (20) 平塚らいてふ「元始、女性は大陽であった」(上)、大月書店、一九七一年、三三三頁。
- (21) 瀬戸内晴美『美は乱調にあり』、角川文庫、一九六九年、八頁。
- (22) 「座談」、『近代思想』一一三、一九二二年二月。
- (23) 家永三郎『津田左右吉の思想史的研究』、岩波書店、一九七二年、三三九頁。
- (24) 松尾尊寛『大正デモクラシー』、岩波書店、一九七四年、三〇九頁。
- (25) 鹿野政直『大正デモクラシーの底流』、NHKブックス、一九七三年、三四頁。
- (26) 同『大正デモクラシー』、小学館、一九七六年、三五頁。鹿野氏は「大正デモクラシーの思想と文化」(『岩波講座・日本歴史』18巻)ではこれを「非天皇制文化の胎動」という形でとらえようとした。
- (27) 『近代日本思想大系・山川均集』、筑摩書房、一九七六年所収。
- (28) 家永、前引書、三四四頁。
- (29) 同、三四一頁。
- (30) 鹿野、前引『大正デモクラシー』。
- (31) 「欧州の大乱と社会主義者の態度」、『第三帝国』七、一九一四年八月。
- (32) 正木ひろし『近きより』一一三、一九三七年(旺文社文庫『近きより』)、一九七九年、六〇頁。
- (33) 「時が来たのだ」、『近代思想』、二一四、一九一四年一月。
- (34) 加藤周一「日本人の世界像」、『加藤周一著作集』第七卷、平凡社、四〇四頁。
- (35) 「再び相馬君に与う」『近代思想』二一五、一九一四年二月。
- (36) 「銅貨や銀貨で」、『近代思想』二一〇、一九一四年七月。
- (37) 「個人的思索」、『近代思想』三二四、一九一六年一月。
- (38) この時の朝鮮人革命家については齊藤孝氏の考察がある。『歴史学の周辺』、東京大学出版会、一九七九年、所収の「或る革命家の人物像」。
- (39) 大杉『自叙伝・日本脱出記』、岩波文庫、一九六七年、二八四頁以下。傍点は引用者による。
- (40) 拙稿「大杉版『労働運動』ノート」、筑波大学附属高校「研究紀要」21号、一九八〇年。